

## 目 次

文化財を守り伝える京都府基金10周年の歩み	1
寄附いただいた方へのインタビュー区 安田 育生 氏	2
寄附で保護される京都の文化財 ～平成29年度に実施した事業について～	3
寄附いただいた方々の京都文化体験	7
平成29年度の寄附の状況	10
「文化財を守り伝える京都府基金」の概要	11

## 文 化 財

### こ ぼ れ 話 13

#### ○ 問題「〇〇寺を作った人は？」 答え「大工さん?!」

よくあるなぞなぞですが、前号でも紹介した棟札<sup>※</sup>には実際に大工の名前が書かれています。大工は「棟梁」を筆頭に「助（すけ）」、「木挽（こびき）」、「小工（しょうく）」からなる集団を構成し、チームで建造物を建築していました。このほかに「屋根師（やねし）」が加わることもあったようです。

小さなお堂や神社は、地元や近隣の集落の大工職人が「大工」または「大工棟梁」として建築作業全体を指揮しました。大きな建物の場合には、地元の大工職人を補佐するために、遙か遠方の大工が集団でやってくることもありました。例えば綾部市の施福寺には丹後加悦の富田大工が、京丹波町の岩山神社には播磨の三木大工が、それぞれ「助」として来ています。長岡京市指定文化財となっている光明寺の勅使門は、はるばる尾張国名古屋から大工集団がやって来て築造したことが分かっています。

※建物の建築年や日時、目的や関係者の名前が書かれた板で、建物の棟木（むなぎ）に打ち付けられていることが多いため「棟札（むなふだ）」と呼ばれています。



岩山神社に残された「棟札」。右の札には地元大工の、左の札には三木大工の氏名が記されています。